



連載50周年記念特別展

さいとう・たかを

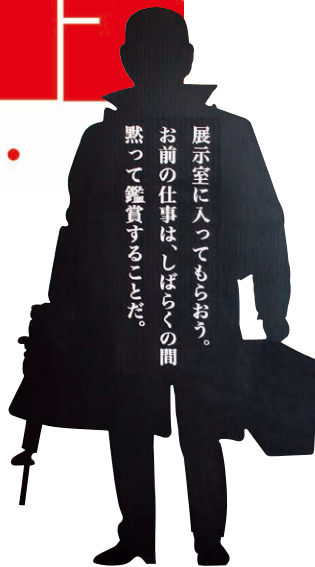
ゴルゴ13

用件を聞こうか……

初公開となる原画やゴルゴが使用する銃のモデルガンを展示するほか、アーマライト体感コーナーやプロダクション再現コーナーなども設置【関連行事】

▷ギャラリートーク= 3月2日(土)午後2時

期 3月24日(日)まで ※月曜日休館
 料 一般1,200円 大学生900円
 園 市立美術館 (☎245-4131)



展示室に入ってもらおう。
 お前の仕事はしばらくの間
 黙って鑑賞することだ。

「学んだことがたくさんあります」と話す豊田さん。「ゴルゴは完璧に仕事をこなします。なぜ、完璧なのか。例えば私が好きなセリフに『おれが、うさぎのように臆病だからだ：臆病のせいだこうして生きてる…』。また『この世界は、病的な用心深さと、それ以上の臆病さを持ち合わせている奴だけが、生き残れる資格を持っている』というものがあります。ゴルゴは臆病なんです。だからこそ、仕事を受けるときには徹底的に依頼人のことを調べ、下準備もします。私たちが仕事をする上でも同じだと思っ「うんです」。最悪の事態を想定してそのリスクを回避するために必要なことをするといいです。「リスクマネジメントが徹底しているんです。実生活にも役立つことが多いですね」

孤

高の超A級スナイパーとして圧倒的な存在感を放つ劇画「ゴルゴ13」。本名、国籍、生年月日などすべて不詳ながら、任務遂行の姿勢、名言、信条などは、大勢のファンの心を捉えて離しません。連載開始は1968年11月。総発行部数は2億部を突破、コミック界における連載最長記録を更新し続けています。

2月1日の開会式と一般公開初日となる2月2日には、作者のさいとう・たかをさんも会場を訪れました。2日にはサイン会が行われ、多くのファンでにぎわいました。

徹底したリスク管理
 本展企画者であり、自身も大のゴルゴ13ファンという豊田美緒さんに話を伺いました。「ゴルゴ13か

特別展企画者
 読売新聞大阪本社
 事業本部文化事業部
 豊田美緒 さん





海へ向かうエバ

本展では、ゴルゴ13に登場する女性の中から100人を選出して紹介するコーナーを設けています。「いろんな女性が登場しますが、大好きなのが『海へ向かうエバ』のエバですね」。女性コーナーとは別に、原画15枚とともにじっくりと読める「エバゾーン」を設置。「フランス映画のような作品で、女性にも大変人気があります」と豊田さん。「ゴルゴ入門編としても最適な作品。エバの表情の変化に注目しながら読んでほしいですね」

初心者からマニアまで

大阪市、盛岡市、川崎市と続き、巡回展のフィナーレを飾る下関での特別展。「過去3会場では、男性のファンが多いのですが、カップルや夫婦で来られる方も多かったですし、女の子同士で来る方もいますよ」。観覧者の特徴は「とにかく滞在時間が長いですね」。メモを取りながら鑑賞する方も多くいます。「原画や貴重な資料はもちろん、解説や豆知識をしっかり紹介していますので、マニアの方だけでなく、初心者の方が来られても十分満足していただける内容になっていると思います」

ゴルゴ13、50年の軌跡。会場に足を運んでみてはいかがでしょうか。ゴルゴ13が待っています！

連

載50周年を記念した特別展を下関市で開催していただき、感謝しています。私は関西の港町で育ったのですが、もっと雑然とした感じで、同じ港町でも下関はずいぶん違いますね。下関に来たのは初めてですが、本当にゆったりとしていて、景色も悠大で、いい街だと感じました。こんな所で育つと、おおらかな気持ち



を持った人間になれそうですね。下関市出身の直木賞作家、船戸与一さんが、実はゴルゴ13の原作を30本程書かれました。私と下関市とのご縁ですね。私は新しいものを生み出すために、過去の作品に執着しないように、なるべく忘れるよう心掛けているのですが、船戸さんの原作は非常に面白く、記憶に残っているものが多いですね。修正もわずかでゴルゴ13というものを

ゴルゴ13作者

さいとう・たかをさん

劇画家。本名、斎藤隆夫。1936年11月3日、和歌山県で生まれる。少年時代から大の映画好き。中学時代に手塚治虫氏の漫画に出会い、漫画の将来性を感じる。「空気男爵」でデビュー。映画のように大人が感動する「劇画」というジャンルを定着させる。制作過程と役割分担に映画づくり同様の分業制を導入した「さいとう・プロダクション」を設立し、劇画界をリードする。



船戸与一さん

1944年-2015年。下関市後田町生まれ。2000年に「虹の谷の五月」で直木賞を受賞。「外浦吾朗」の名前で、ゴルゴ13の原作を30作品

手掛ける。「おろしや間諜伝説」など内3作品は小説化されている。

写真提供：田中絹代ぶんか館

よく理解してくださっていました。

私は劇画家として、時代の観念や常識に流されることなく、どうしたら読者を楽しませることができるか、ということだけをずっと考えながら連載を続けてきました。今回の特別展も、ただただ楽しんでいただきたい、そう思うばかりです。多くの方にご来館していただけるとうれいしですね。